

(議事概要)

第2回徳島県観光スポーツ文化庁指定管理候補者選定委員会
〈文学書道館〉

日時: 令和7年10月9日(木) 12時25分～13時35分

場所: 県庁8階 804会議室

(公財)徳島県文化振興財団 提案説明

質疑応答

(委員等)

要求水準におきまして入場者数を増やさないといけないということがあったと思います。かなり倍近くしないといけないとなった時に、できるのかっていうのがあります。果たしてその入場者が、どういうものなののかも含めて。

もう一つは、もっと柔軟に見直すことできないのかと。例えば、この教育普及が全然変わってないわけです。こういうのも含めて、もっと毎年毎年、柔軟に変えることはできないのかという印象があります。

(申請者)

まず、教育普及について、この書道講演会や文学講演会という、大きな何でも入れられる器として置いています。ですからその講演をする人たちというのは、毎年当然変わってきます。もちろん、5年間開催している間に新しい企画が浮かんだりした場合には、そういうものを取り入れていきたいと思っております。

それと、前段のご質問ですが要求水準にあります、令和6年度の1.5倍の人数が確保できるのかということですが、広報にも力を入れていきまして、20代の若い職員もいますので若い視点から、SNSを使って発信力のあるPRを行います。

(委員等)

私もこれを見させていただいて、コピペをしたのかなっていう感じがしました。教育普及のところが特に。

(申請者)

すべて大きなタイトルですのでその中に何でも、盛り込める器として記載しています。

(委員等)

今流行しているものを見たいっていうのが行く者としてはありますので、こんなに実施が先になるのかという感じがしました。

(申請者)

時流を追うことが果たしていいのかどうか。我々もタイムリーにやって入場者を増やしたい、というのは当然日頃から考えていることではあります。

(委員等)

延べ人数ではなくて実人数で言うとかかなり限られているのではないかという印象があって、その点でこれだけ県の税金を入れることに対してどうなのかと考えてしまいます。それを考えた時に、ある程度県民が利用できるっていうのを念頭にさせていただかないと、税金を入れている以上は。

(委員等)

本当に限られた人向けの施設になっちゃうのではないかなというのが。

(申請者)

やはり文学書道館としては、書道をやっている人たちのレベルを上げていくことも重要な役割だと思っておりますので、地味に外からは見えるかも分かりませんが、非常に大切なことだと思います。

(委員等)

あと教育普及ですが、宿題のサポートみたいなのがあっていいと思いますが、教育普及・文学のところでは、教育普及は毎回同じになっていて、他にもう少し、低年齢を対象にするようなものを、入れ込めないかなと思います。ここで、教育普及してくれたらすごく助かるし、親もなかなか、教え方が難しいと思うのでそういった視点も少し取り入れて、親御さんのニーズも取り入れながら、毎回違うのをに入れていくとかやはりそういった、観点も考えていただけたらなと思います。

(申請者)

文学書道館の入場者というのは、中高齢が多いです。家族連れでも入れるような展覧会や実技講座も、これからはやっていかなければいけないと考えております。しかし、文学書道館が全てを引き受けるというのは、例えばですが、おっしゃられた読書感想文も書道もやっぱり教育現場で、学校でやっていただきたいと思います。文学書道館で全てのものを受けないといけないということではないと思いますが、子どもたちが来てくれるようなものに、これからは力を入れて考えていきたいと思います。

(委員等)

特別展で令和5年では10月は471人、それが、令和6年は289人。ひと月に289人というのが、営業日で考えても1日に10何人しか来てない。これはやっぱり、その公共の施設として、やはりどうなのか。

それから、今の書道館があるエリアっていうのは文教地区で、小学校・中学校と色々と、子どもの施設がたくさんあります。もっと、その今の子どもたちがフラッと行けるような。やはり、中高年のリピーターが多いとしても、その人たちが、文化を次に伝える役目にはない感じがして、今の活字離れとか色んなことがある中で、もう少し、こう時代に寄り添った企画・展示があれば。もっと、とっつきやすい書道といいますか。

文学書道館は、格式あっても、ただ何か近寄りにくい。それから、何をやっているかっというところでの情報発信のミスマッチっていうのもありますけど、実際に今、この企画書に挙げられている作家さんとかの名前も近所の小学校、中学校、高校含めて、知っている人が何人いるか。そういった、ホットなフレッシュな情報をもっとやっていただきたいなと思います。

(申請者)

常に展覧会をやっていかないと地方の文学館は、その地方ゆかりの地味ではあってもその作家を、調査・研究してその成果を展覧会で公開することも大事です。地方で文学館の一つの大きな役割というのは、やっぱりそこに収蔵されている地方の作家の展覧会をきちっと行い、検証をずっと続けていくということが非常に大事です。

(委員等)

それは、常設展でいいのでは。

(申請者)

常設展では、簡単な紹介しか行っていないため、もっとたくさん資料などをみなさんにお披露目して、その作家の研究・検証が大事です。それを研究して公開していくというのは非常に大事な文学館の役割の一つです。もう一つは、有名作家の展覧会などを行い入場者を確保して文学書道館に親しんでもらう。そういうことも一つの役割です。この2本柱を続けて行きたいと思います。

(委員等)

ただ、企画展をやる時にその、現代的なテーマに照らしてどう見えるのか、新しい視点を入れた発掘や、今のSFに関して県ゆかりの作家がどう繋がっていくのかとか、視点からのタイトル決め一つでも、やはり新しい若い人が、最近人気のあのSFに徳島の作家が昔、面白いことを言っていたのだとかいう、そういう今の我々に寄り添った、切り口があるのではないかというふうに思います。

(申請者)

現代に与えている影響を検証して、作品にしたいなという展覧会です。ですから、これは現代に繋がっています。

(委員等)

もっとPRといいますか、表に出す言葉を、工夫された方がいいのではないですか。

(申請者)

タイトルは、課題ですので。展覧会を実際にやる時には、そのように行いもう少し、キャッチーな言葉を入れていくことは当然。

(委員等)

今の企画展とか見せていただいても、こう、すごいキャッチーなっていうか、訴えるようなものがあんまり見えない。なんかこう、静かな格調高い感じしか見えない。

(申請者)

みんなが親しみやすい内容になっているものもあると思いますが。

(委員等)

ちょっと、時代が今の 20 代、10 代の人には。

(委員等)

だから、子どもが見て理解出来るのかということです。少しアッパーなところに寄っていないかと思います。もう少し上に広げて見たらどうですか。

(申請者)

見ていただいたら本当に面白いですよ。でも、名前知らないから行かないとかではなくて。

(委員等)

最初の入り口が大事です。入り口のところで、どうやって、これはこうだけど、いかにして最初に呼び込むことです。スマホしか見ていない子たちを相手にする、ということを念頭に置いて PR しながら、ネーミングしながら行って、多分ここで好きになるなんてこともあると思います。まず、最初の入り口というのがまだそのイメージがあんまりないのかなというのがあるので、そこを広げられた方がいいのかなと感じがします。

(申請者)

現代的な、モダンな書道にしてもそういうものも選んで入れています。

(委員等)

入り口のところです。もっと言うと PR の仕方。

(申請者)

別の館などに見劣りしないような徳島の作風にそこも変えていくような、現代的な新しい実験的な試みの作品とかそういうものを、どんどんやっていきたいと考えています。

(委員等)

そういうメリハリをつけることです。硬派でいくところとある程度ソフトタッチのところと使い分けをしながら、常にお堅い感じだけにとられているわけです。そこはどこかでこう織り交ぜてというようなことを考えられた方が恐らく良いです。そこできっかけになった人が、今度はもっとどんどんハードなものを求めるかも知れません。そういうことも含めてされた方が良いかなと思います。

(申請者)

今頃、この作家なんだという捉え方をする人もいるかも知れませんが、現代の社会問題についてこそ作家がどうやってそれを乗り越えていったか、というようなことまで出てきますので、そういうこう時代のタイムリーなことを、常に考えて企画をしております。

中高生は、土日は無料です。どんどん来てくれたら良いのになかなか来てもらえません。PR もしっかりとしているつもりです。もっともっと来てくれたら良いのにと私たちも思っています。見ていただけたら良さは分かってもらえると思います。

(申請者)

まずは足を運んでもらうということが大切だと、掴みが大切であると分かりましたので、若い職員も何人かいますので若い職員の感性を使いながらまず、来ていただけるような効果的な PR をしていきたいと考えております。

＜選定委員間で意見交換を行ったところ、さらなる検討と申請者への詳細な聞き取りを行う必要があるとの判断になり、継続審査となった。＞

(議事概要)

第3回徳島県観光スポーツ文化指定管理候補者選定委員会
〈文学書道館〉

日時: 令和7年11月6日(木)10時50分～11時25分

場所: 県庁3階 第四応接室

公益財団法人徳島県文化振興財団 提案説明

質疑応答

(委員等)

やはり若い世代、高校生、中学生、小学生に来てもらうかが非常に重要だと思うんですけども、学校の先生とどのような形で今まで連携されて、今後どう考えられるのか教えていただきたいです。

(申請者)

従来より文学と書道それぞれ1名ずつ、高校教員が当館に配属されております。ですので、その教員を通じて学校とかの連携は取れるような形になっておりますので、学校のニーズといったものも教員を通じて把握をしながら、連携した取り組みを今後さらに進めていきたいと考えています。

(委員等)

例えば、今高校だと思うんですけど、中学、小学校もある。徳島市だと県市協調ってなる。そこをどうされますか。

(申請者)

すぐお隣が中学校で、お隣同士ということで連携してきた部分はあるんですけど、小学校、中学校がこれまで開拓できてなかったのも、教育委員会とも話をしながら、小学生の作品を展示する機会とか、発表する機会とか、そういう取り組みを模索をしていきたいと思います。

(委員等)

ちょっと手間かかるんですけど、それはされた方が良いのかなと思います。

(申請者)

今いる高校教員も色んなネットワークがあると思いますので、そういった人材も活用して、委員おっしゃられたように進めていきたいです。

(委員等)

今の話の続きと言えば、小学校、中学校、本当に徒歩圏内なんです。放課後とか、夏休みだとか、あそこら辺の学校って、割と近くに行ける場所がないときに、宿題をやりに行くって文学書道館に行けたり、意外と住んでる人でも入ったことがないって

う人が多いので、住宅地、文教地区にあることのメリットを活かしていただけたいかなと思います。

(委員等)

来館者増に向けて、魅力的な展覧会の開催ということで、若い世代に向けてライトノベルとか、あとエンタメ作家とかって、その時期に応じて安定した集客が見込める展覧会を開催するという理解でよろしいのでしょうか。

(申請者)

例えば、所蔵品であれば臨機応変に、この度の竹宮恵子さんの展覧会にしても部屋さえ確保できればやっていけるんですけど、借りてこないといけないものがあるのであれば、先方との話もありますので、すぐにはできない、難しいところもあると思います。ただ、すぐにはできなくとも、できるだけ早く、できるような努力はちゃんとやっていかないといけないと思っております。

(委員等)

エンタメ作家とか、身近な若い人たちに興味湧きそうなのところがあるかと思うので、ぜひ開催いただけたらと思います。

(委員等)

先ほど学校との連携の話が出ましたが、大学とはどうなのでしょう。例えば、四国大学の書道科さん、鳴教だったりとか、そういったところの先生、大学の方や大学生との交流もあっていいのかなと思いました。あと徳島にゆかりのある三宅香帆さん、文芸評論家の方をぜひ呼んでいただきたい。小説について語っていただくみたいなのをすれば、若い方がすごく興味持って来られるのかなというふうに思ってます。

(申請者)

まず1点目の大学との、高等教育機関との連携のお話ですけども、四国大学の学生についてはインターンの受け入れをしております。私どもの仕事のお手伝いをしていただきながら、インターンをやってもらってるわけなんですけれども、終わる2日前にですね、それぞれの学生に自分で企画書を作ってもらって、それを我々とか学芸員の前で発表していただくという機会を持っております。それに対して、学芸員がアドバイスをしたり、意見を言ったりして、学生のスキルアップに繋がっていくということもやっております。それから席上揮毫の中でも、四国大学の書道部の学生さんにお手伝いに来ていただいて、作品を壁に貼ってもらったりしてもらってます。他の大学とも、広げていかないといけないかなと思いますので努力していかないといけないかなと思います。

それと、三宅香帆さんのお話ですけども、4年ぐらい前、一度講座で来ていただいたことはあります。まだ、今ほどお名前が知られる前で、やはり徳島出身の方ということで、講座を一度していただいたことがあります。

(委員等)

今まで入館者数が増えなかったことで、催し物を新しいものにしていくのはあると思

うんですけど、てこ入れみたいなことは何かないのかなと。それと、てこ入れの話で木のおもちゃ美術館ですね。ボランティアの方を本当にいっぱい登録されてて、ボランティアの方が子どもと遊ぶみたいなことをされてるんですけど、そういう市民の方を巻き込むような、友の会でも、催し物のときに手伝ってもらうとか、巻き込むようなことをして、もっと人を呼び込むような企画をされたらどうかと思ったもんですから。

(申請者)

まず体制について、マンパワーが今いっぱいいっぱいなところもあります。特別展となりますと担当の人が図録作ったり、ポスターのデザインとか手間がかかってる。相手方から作品借りてくる折衝とか 1 人でやるようなところがあって。単純に増やせれば、もっと違った形で組めるかなと思う時もありますけども、まずは今ある体制の中で学芸員が考えていくようなことを、内容を充実するような形でやっていけたらと思っています。

友の会はありまして、今、大体 180 か 190 人ぐらい登録をしていただいています。そういった方にお手伝いをいただくことも、お話をお伺いして思ったりしました。市民で言いますと、毎月ロビーにお花を飾っていただいています。こういったことが館内で手が足りないので、こういった方にこんなことをしてもらえたらというのを掘り起こした上で、市民の手も借りてということがあれば前向きに考えていきたいと思います。

(委員等)

ある程度、高齢化した人たちがリタイヤして、もう 1 回文学に親しむとかそういう場として入りやすい、友の会の人がいるなら、テーマ決めて 1 人の作家の作品について語る日を作ったり、そういう形の参加とか、書道って徳島盛んなんですけど、今の小学生とか家に筆と半紙があるかなって。筆を持って書いてみるっていうことを 1 つの体験として日々できる、土曜日 1 日、床にビニール敷いて書いてみよう、体験してみよう、墨をするっていうのも分かんないと思うんですよ。ペタペタするとかそういうことを体験できる場所っていう、新しいそういうものを作っていただいて、そこはボランティアの、友の会の方とか、四国大学の書道部さんも非常に全国でも珍しい書道部ということで、全国の方が来てて、子どもさんに指導したり、書く体験と一緒にというのはお互いにとっていい機会になるんじゃないかなと思うので、外の人の手も借りながら、開かれた文学書道館っていうのを目指していく。5 年後ぐらいにはポスターのデザインとかも、一般の方で、大学にデザイン部とかあるので、やりたい方いらっやと思う。そういう人にやっていただいて、応援いただくっていう形を将来に向けて作って行って、もっと県民に近づく書道館になるんじゃないかなっていうのは、今回、私たちが感じたことです。